

## 「一般社団法人まち物語制作委員会」の活動を見学しました

広島市佐伯区の広島なぎさ中学校・高等学校で2024年11月24日（日）に開催された絵おと芝居2024を見学してきました。



「絵おと芝居」とは、ステージ上のスクリーンにデジタル映像を投影し、音楽の生演奏をBGMに、語り手による声のお芝居が繰り広げられるという、新時代の紙芝居で、紙芝居作家のいくまさ鉄平さん（=まち物語制作委員会 代表 福本英伸さん）の作品です。

今回のテーマは「ヒロシマを復興させた力」。次世代を担う若者やプロのアナウンサーが語り手を担い、約150名の観客を前に3つの物語が上演されました。

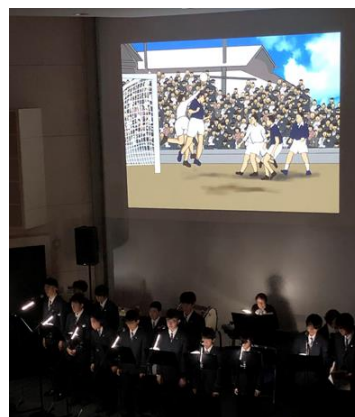
このテーマでの作品制作が開始されたのは、東日本大震災被災地復興支援プロジェクトとして被災地の物語を紙芝居にしてお届けしたことがきっかけとなったそうです。福島の方から「広島はどうやって復興したの？」との問いかけがあったことにヒントを得た福本さんは、平和学習は原爆投下された惨状だけを伝えるだけではなく、未来へ希望をつなぐ「復興」に焦点を当てた内容とセットで伝える必要があるのではないかと考えられ、ヒロシマの復興物語の制作を開始されたそうです。

昨年、広島でG7サミット（主要7か国首脳会議）が開催され、世界の注目がヒロシマに集まった機会に7つの復興物語を制作・発表されて以来、いろいろなところで上演されています。今回は、8つ目の新作「広島バタンコ物語」が完成したことを機に、上演会が開催されました。

1つ目のプログラムは、「復興の力1 広島サッカー復活物語」。上演者は、修道中学校・高等学校の放送班の皆さん、唄とエレクトーンの調べに乗せてステージが始まりました。この物語は、サッカー復活に向け同校のOBで日本代表のゴールキーパーとしてご活躍された下村幸男さんが奮闘されたお話で、76年後の後輩が演じました。

ステージの最後に生徒の皆さんから「この世界が核兵器のない平和な世界になるように声を上げ続けます！」と、力強い宣言がありました。

また、下村さんの取材映像も映写され、「当時は、食糧もあまりない時代でお腹がすいて走るのも大変だったが、そうした中でも生きがいを感じてプレーをしていた。今は自分の目標を持って自由に何でもチャレンジできる恵まれた時代なので、大いに頑張りたい」と、若者へエールが贈られていました。



2つ目のプログラムは、「復興の力2 ヒロシマ7 DAYS」。被爆直後の7日間、責任感から仕事場に駆け付け、市民のために職務を全うされた人々の物語を広島ホームテレビのアナウンサー4名の方が唱とエレクトーンをBGMに演じられました。水道水や電気のライフラインの復旧、市民の足となる路面電車の運行他、75年間は草木も生えぬと言われた絶望の地ヒロシマが、原爆投下翌日から日に日に復活していく様子が生々しく演じられました。

3つ目のプログラムは、「復興の力3 広島バタンコ物語」。戦後資材もない中、復興の一助にするため三輪トラック「バタンコ（愛称）」の生産を開始したモノ作り企業の物語を、広島なぎさ中学校・高等学校の放送部の皆さんが、フルーツやパーカッション、エレクトーンの演奏をBGMに演じられました。

この紙芝居は、同団体と(株)広島ホームテレビ、マツダ(株)、なぎさ公園小学校の協働で作られたものです。ベースとなる絵は、同小学校6年生の児童の皆さんを対象に、コンクール形式で作成されました。児童たちはまず、被爆と復興の歴史を学ぶ授業を受け、物語の朗読を聞いてイメージを膨らませ描き、その中から、素晴らしい作品が選ばれました。



上映当日は、紙芝居に取り上げられた作品を描いた児童に感謝状が贈られるセレモニーもありました。この紙芝居は絵本にもなり、巻末には児童の絵が掲載されています。

来年被爆80周年を迎えます。平和学習の在り方について、新たな息吹を感じました。また、広島には、今回上演された他にも数多くの復興物語があります。この意義深い活動「絵おと芝居」が伝播・拡大し、そして後世に亘って語り継がれ、世代と国境を超えて人々に平和の尊さと勇気を与えられますように願っています。 (本郷)

\*一般社団法人まち物語制作委員会ホームページ：[matimonogatari.iinaa.net](http://matimonogatari.iinaa.net)